

33 ほんものでほんものを――大人に負けないよ――

奈良県生活科教育研究会が歩みだしたころ、県内の各郡市の教育研究団体にも同様の部会が組織され、各小学校での実践的な研究とあいまって地道な研究が進められていた。

桜井市の城島小学校では、学校の向かい側に借りた畑が生活科の教室となり、そこでは、「畑の先生」の指導が確実に実を結んでいた。子どもたちの命名による「畑の先生」というのは、子どもたちの体験や活動を積極的に支援して下さった学校の近くに住むおじいさん・おばあさんのことである。こうした方々の援助でたくさん収穫された小麦は、峙せつ子先生によって「さなぶり餅をつくろう」の学習につなげられた。そこには、大きな杵を懸命に振り上げる子どもたちとそうした活動を見守り、援助するPTAの姿があった。

生駒台小学校でも大麦が栽培されていた。校地の一隅にある学級園に蒔いた大麦が芽を出し、大きく育てたいという願いを実現しようと子どもたちが作った「ふまないでください」「大きくなってね」と書かれたプラカードに守られてすくすくと育っていた。児童数のわりには狭い畑であり収穫も少なかったが、みんなでいただけるようにと考えた松田直恵先生たちの工夫で麦茶に加工され、子どもたちののどを潤したものである。

生駒東小学校では、大豆が栽培されていた。たくさん採れた大豆は倉屋公子先生と子どもたちの手で近くのお豆腐屋さんに運ばれ、豆腐に変身した。ふだんの日では、お客様に迷惑になってはいけないからという店主の配慮で、休日に工場を開けていただいて、子どもたちが豆腐づくりに挑戦したそうである。私もお相伴にあずかったが、なかなかのきばえであった。

この「大豆を育てよう」の単元は、大豆を播き、育て、収穫し、豆

腐を作り，栽培活動を振り返って発表会をするという息の長い取り組みである。このまとめの最後には次のような報告がある。

お豆腐作りをした翌日，

「先生，”おとうふのうた”を作ったんだけど，どうかな」

と，Kさんが詩をもってきた。そして，みんなにメロディーをつけてほしいとお願いした。歌にして歌うことには全員賛成だが，メロディーをつけることはまだ難しい。そんなとき，音楽の堪能なMさんが，「わたしが作ってみます」

と名乗りをあげてくれて，『おとうふのうた』ができあがった。

この，ハ長調4分の4拍子の16小節の歌には，お豆腐作りの情景が生き生きと表現され，

「できた，できた。お豆腐だ。お味は満点，百点だ」

には，物を作る喜びが満ちている。

こうした事例をあげていけばきりが無い。このような新しい分野の研究に取り組む教員の姿は印象的であった。文字どおり新しい教科の創造であった。私は，生活科を「生きてはたらく力」を育てる場になりたい，ひとりだちの力を培う教科として育てていきたいと考えた。そして，まやかしのものではなくほんもので勝負する教科にしていくために，県生活科教育研究会の機関紙に「ほんものでほんものを」と題して，こんなことを書いている。

.....

「コン，コン，コン」

「トン，トン，トン」

とりズミカルな音が聞こえてきます。子どもの前にあるのは分厚い板

です。そして、左手に持っているのは太く長い釘です。朝の光に照らされてピカピカと美しく光っています。

そして、右手に持った金槌は、ほんものの金槌です。この金槌の柄には汗がにじんでできたものでしょうか、黒っぽい「しみ」があり、全体が茶色に染まっています。十分に使いこまれた様子が伺える部分です。黒くにぶい色をした金属の部分は、この金槌がほんものであり、長い間、物を作るにかかわってきたものであることを示しています。これは、もう 10 年以上も前に参加した園内研究会における子ども活動の姿です。

ところで、私たち大人の考えの中に、

「子どもだから、おもちゃでよい」

「子どものことだから、少々不具合のものでもいいだろう」

といった考え方はないでしょうか。でも、

「子どもだからこそ、ほんものを手渡してあげたい」

「ぼくも一人前なんだと思わせるためにも、大人と同じものを使わせてやりたい」

そんなふうにも思うのです。

このような「ほんもので」の教育は、ほんとうに生活とかかわった学習をすすめることになり、「ほんものを」学ばせることにもつながっていくことでしょう。そして、

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち……」

という生活科の目標の達成につながるのだと思います。

